

## 古代教会における「聖書的語りの共同体」<sup>1)</sup>

本 城 仰 太

### はじめに

イギリスの作家として知られているドロシー・L・セイヤーズの『ドグマこそドラマ』<sup>2)</sup>の中に最初に収められている「地上最大のドラマ」(これは講演の草稿である)にこのようにある。

教会が語っている物語を概括するならば、そういうことになります。神が虐げられ、鞭打たれたというのです。神がみずから計画なされた状況に身を置かれ、みずからが創造された人間の一人のようになられたというのです。神によって創造された人間が寄ってたかって神を傷つけ、殺した—これこそが、私たちが退屈だとレッテルを貼っているキリスト教の教理(ドグマ)です。神が同時に神にささげられた犠牲であり、虐げられた人間が同時に英雄であるという、たいへんなドラマです<sup>3)</sup>。

『ドグマこそドラマ』というのはインパクトのあるタイトルであると思うが、原著のタイトルは“Creed or Chaos?”である。そのまま日本語に訳せば『信条か、混沌か?』ということになるだろうが、彼女が最も言いたかったことが、上記の引用した箇所に表示されていることから、このような日本語のタイトルがつけられた。聖書に記されている創造、墮罪、救済、そして完成という物語が、

ドグマ（教理）であり、そして同時に驚くべきドラマであるということである。原著の Creed という言葉を活かすならば、聖書物語と信条（ドグマ・教理）は大いに結びついている、というのが彼女の最も大きな主張である。

このことは古代教会では特に顕著である。イエズス会士のブライアン・E・デイリーはこのように述べている。

新約の著作それ自体に現れているように、キリスト教的聖書解釈の最初の段階から、初期のキリスト教的積義家たちは、命を与え回復させるため世界のただ中で働く神の業を物語る、単一の物語と想定された背景に照らし合わせて、個々の章句を理解しようとした。物質的な宇宙と知的な存在者（人間）の住む世界を神は創造されたということから始まり、罪によって人間が神から離反した物語、そして啓示と祝福の担い手となるように特定の民を召し出した物語を通して、物語はさらに継続する。この救済し和解する業のクライマックスが、ナザレのイエスの人格、教え、死、そして復活である。この次々と大アーチを描いてゆく信仰の物語という見方は…<sup>4)</sup>

ここでも、創造、墮罪、救済、そして完成という神の業が、古代の積義家たちによって物語られてきたことが主張されている。聖書に記されている神の業をドグマ、信条として物語る共同体、それこそが古代教会なのである。本論文では「聖書的語りの共同体」という主題を、古代教会の文脈に照らして「聖書的」「語り」「共同体」という三つの切り口から考えていきたい。

## 1. 聖書的

今回の主題は「聖書の語りの共同体」ではなく「聖書的」である。古代教会の文脈を考える際に、「聖書」ではなく「聖書的」であることは非常に理に適っている。なぜなら、古代の時代には、まだ「聖書」が形作られていなかったからである。「聖書」という大事なものがあるという共通理解はあった。し

かし何が聖書なのかをめぐって、激しい論争が交わされていたのである。

リヨンの司教であったエイレナイオスは、グノーシス主義に反駁するために『異端反駁』を記した（180年代）。その中で彼はこのように力説する。

福音書はその数に関していえば、これより多い数でもありえないし、また逆により少ない数でもありえない。なぜなら、私たちのいるこの世界の主要方向は四つであり、主要な風も四つであり、他方教会は全地上にまき散らされていて、福音と生命の霊がその教会の柱であり、支えであるゆえ、あらゆる方向から不死性を吹き込み、人びとを再び燃え立たせる柱をこの教会が四つ持つことは理にかなうことだからである<sup>5)</sup>。

したがって、以上のものであるとすれば、福音が四つの顔を持っているその形を軽んじ、福音の四つの顔を上述したものよりも多く取り入れようとしたり、あるいは反対により少なく取り入れる人びとは皆、虚しい、無学な人々であり、その上更に軽はずみである<sup>6)</sup>。

エイレナイオスはまったく逆の方向性を持つ二つの論敵たちを想定し、この主張を展開している。一つの論敵とはグノーシス主義であり、福音書を四つにとどめず、もっと増やそうとする傾向を持つ。もう一つの論敵とはマルキオン主義であり、福音書を（ルカのみ）一つに限定しようとする傾向を持つ。エイレナイオスはその中間に立ち、福音書は四つであると主張しなければならなかった。なぜ四つなのか。これは難問である。エイレナイオスはヨハネの黙示録の記述を用いながら、また当時の「四」という数字の持つ真理性に依拠しながら、このように力説しているのである<sup>7)</sup>。福音書が四つであるということは、権力を持った誰かが決めたわけではない。しかし二世紀末のエイレナイオスの時代に、すでにその枠は自ずと形作られようとしていたのである。

エイレナイオスの時代から二百年弱が経ち、いわゆるキリスト教公認の時代を迎えていた頃、エルサレムの司教であったキュリロスが行った『教理講話』

(350年頃)の中で、このように語られている。

新約聖書には四つの福音書があり、数は四つだけであり、他のいかなるものも偽りであり有害である。マニ教徒らはトマス福音書という別のものを書き、それは福音の香りと色合いがするかもしれないが、単純な人たちの魂を誤らせるだけである。十二使徒の言行録も受け入れなさい。ヤコブ、ペトロ、ヨハネ、ユダの七つの公同書簡も加えなさい。また、弟子たちの最後を締めくくるパウロの十四の書簡を認めなさい。他の書物はいかなるものでも二次的なものとするように<sup>8)</sup>。

【教理講話】は後のところで詳しく触れるが、これから洗礼を受けようとして  
いる受洗志願者たちへの講話である。この講話の中で聖書のことも触れられ、  
新約聖書には二六の書簡があるとされる。キュリロスによればヨハネの黙示録  
はその中に入っていないのである。

キュリロスと同時代を生きたアタナシオスは、【復活祭書簡】(367年)の中  
で、このように述べている。

新しい〔契約の書〕をも躊躇せず述べてよう。実に、以下のものである。  
四つの福音書、即ち、マタイによる、マルコによる、ルカによる、ヨハネ  
による〔福音書〕。これらの後に使徒言行録と使徒たちの公同書簡と呼ば  
れる七つの〔手紙〕。それらは、ヤコブの〔手紙〕が一つ、ペトロの〔手  
紙〕が二つ、次いでヨハネの〔手紙〕が三つ、これらの後にユダの〔手  
紙〕が一つである。これらに加えて、使徒パウロの手紙が一四ある。順に  
記すと以下のようなものである。まず第一にローマの信徒への〔手紙〕、次にコ  
リントの信徒への〔手紙〕が二つ、それらの後にガラテヤの信徒への〔手  
紙〕、そして次にエフェソの信徒への〔手紙〕、次にフィリピの信徒への  
〔手紙〕とコロサイの信徒への〔手紙〕、そしてそれらの後にテサロニケ  
の信徒への〔手紙〕が二つとヘブライ人への〔手紙〕、それに続いてテモ

テへの〔手紙〕が二つとテトスへの〔手紙〕が一つ、最後にフィレモンへの〔手紙〕。そしてまたヨハネの黙示録である<sup>9)</sup>。

キュリロスとは異なり、アタナシオスはヨハネの黙示録も新約聖書の中に含めている。アタナシオスのこの史料が新約聖書の二七書簡を記している最初のものであるとされている<sup>10)</sup>。

四世紀末に、この二七書簡が新約聖書の正典であるということが、教会会議でも決議されるようになり、教會的な承認を得たのである。例えば、カルタゴ教会会議（397年）ではこのように定められた。

教父たちは同意した。…正典目録にあるもの以外は教会内で聖書として読んではならない。正典は次のものである。創世記、出エジプト記、レビ記、申命記、ヨシュア記、士師記、ルツ記、列王記4巻、歴代史2巻、ヨブ記、ダビデの詩編、サロモンの書5巻、預言書12巻、イザヤ書、エレミヤ書、ダニエル書、エゼキエル書、トビヤ書、ユジト記、エステル記、エストラ2巻、マカバイ記2巻。新約聖書としては、福音書4巻、使徒行録1巻、使徒パウロの書簡13と同作者のヘブライ書、ペトロの書簡2、ヨハネの書簡3、ヤコブの書簡1、ユダの書簡、ヨハネの黙示録<sup>11)</sup>。

このように四世紀末になってようやく新約聖書の二七書簡が正典として定められ、「聖書」ということを語るできるようになった。それ以前の古代の時代は「聖書」が形作られていたものの、まだグレーな状態であり、何が「聖書的」であるのか、正典をめぐる論争がなされていた。

さて、この「聖書的」ということの考察をもう少し深めていこう。「聖書的」と言った時、「伝統」のことが考えられなければならない。伝統 tradition は、もともとはラテン語の *trado*（私は手渡す）に由来する言葉であり、イエス・キリストから使徒、使徒から教会へと手渡され、今の私たちに至るまで手渡されてきたもののことである。何が手渡されたのか。後述するように、古代教会

の教父たちは「信仰の基準」(regula fidei) が手渡されてきたと主張する。この「信仰の基準」はその後の信条や教会が制定していった教理ともかかわるため、「伝統」とは広い意味での「信条」や「教理」も含まれる。

そこで、「聖書」と「伝統」の関係を考えてみたい。棚村は先行研究を踏まえながら、「聖書と伝統」に関する五つのモデルを提案している(1. 古典的相互補完理論、2. 単一源泉理論、3. 二重源泉理論、4. 聖書主義理論、5. 証言機能理論)<sup>12)</sup>。ここで特にかかわるのが、1. 古典的相互補完理論と2. 単一源泉理論である。

2. 単一源泉理論は、聖書と伝統をそれぞれ次のように定義する。聖書は「規範している規範」(norma normans)であり、伝統は「規範された規範」(norma normata)である。normaというのは名詞であり、どちらも「規範」(norma)であることには変わらない。しかし名詞normaに付随している分詞が異なる。normansは現在能動分詞であり「規範している」、normataは完了受動分詞であり「規範された」の意味である。どちらも大事な「規範」(norma)なのだが、聖書は能動的に「規範している規範」であり、伝統は受動的に「規範された規範」である。伝統は何に「規範された」のか。当然、聖書によってである。したがって両者の力関係としては、聖書が主、伝統が従ということになる(聖書>伝統)。この2. 単一源泉理論とは「聖書のみ」を主張しつつも、聖書を基にした伝統(すなわち信条や教理)を重んじる立場であり、16世紀以降の多くのプロテスタント教会の立場がこのモデルなのである。

しかしこの2. 単一源泉理論は、聖書正典が確立した後に意味を持つものである。伝統より上位の「聖書のみ」を主張したとしても、「聖書」が確立していなければ意味を持たないからである。古代の時代の立場の多くは、1. 古典的相互補完理論であった。これは聖書と伝統が横並びに位置するが、別個独立したものではなく(別個独立は3. 二重源泉理論)、同一源泉であることを意味する(聖書≒伝統)。なぜ古代教会の多くがこのモデルなのか。それは、イエス・キリストから使徒、使徒から教会へと手渡されてきたものが「伝統」であり、それを書き表したものが「聖書」だと考えるからである。このことを最も

的確に言い表しているテルトゥリアヌスの証言がある。

彼らが説教したのは何であったか、言い換えればキリストが明らかにしたものであり、私がここで規定しなければならないように、まさに教会以外に適切に証明される場所はなく、使徒たちが自ら設立した教会においてであり、そこで福音を教会の者たちに直接伝え、その後にもろもろの書簡によって (per epistolas postea) なされたのである。…教会は使徒たちから受けたのであり、使徒たちはキリストから、キリストは神から受けたのであった。…そうすると、この教えが私たちのものであり、使徒たちの伝統 (apostolorum traditione) という基準 (regulam) を与えられたものであると証明され、他の教えはそれ自体誤りということになる<sup>13)</sup>。

ここでテルトゥリアヌスは（特定の異端ではなく）あらゆる異端を想定し、その異端の反駁を展開している。神からキリスト、キリストから使徒、使徒から教会へと手渡された使徒的な伝統という基準 (regula) がある。真の教会はこの基準を持っている。異端は持っていない。その継承の源に遡ることができないからである。この継承は「直接伝え、その後にもろもろの書簡によって」なされたとされる。この継承（伝統）が最初は口伝で、その後は書かれたもの（聖書）によってなされたとの主張が展開されるが、ここでは明確に「伝統」と「聖書」が区別されていない。まさに同一源泉（聖書≒伝統）なのである。

したがって、「聖書」がまだ正典として確立していなかった古代の時代に、「聖書的」と言った時には、必ず「伝統」（信条や教理）が顔を出してくることになる。何が「聖書的」であるかは、イエス・キリストから使徒、使徒から教会へと手渡された「基準」(regula) に即しているかどうかにかかっている。

## 2. 語り

続けて「語り」について触れていこう。現代でももちろんそうであると言わなければならないが、古代は特に「語りの時代」であった。カトリック教会の神学者である小高はこのように言う。

まず念頭に置いておかなければならないのは、古代社会に属する教父時代は「語り」の時代であるということである。今で言えば、書物は筆記する、あるいはパソコンに入力するのが普通であるが、古代においては、著者個人で筆記する例はほとんどない。口述筆記、つまり著者が語るものを速記者が筆記するのが一般的である。また、そのように著述された物を読むにあたって、一般に音読が普通である。したがって、いったん声に出されたものが文章になり、声に出されて読まれたのである<sup>14)</sup>。

そのうえで、古代の説教の類型を五つに分類している（1. 聖書講話、2. 要理教育講話（洗礼志願者に対する講話）、3. 典礼暦年に沿った説教、4. ある個人を称賛する説教、5. 時事的な問題に関する説教）<sup>15)</sup>。本論文では、「聖書的」と「共同体」形成に関わる2. 要理教育講話に着目する。

まずはヒッポの司教アウグスティヌスに着目しよう。彼は『教えの手ほどき』という著作を書いている<sup>16)</sup>。400年頃の著作である。当時の教会では、受洗までに長いプロセスを要した。まずは求道者として登録され、助祭のところまで「手ほどき」を受ける。本書は、カルタゴの助祭デオグラチアスがアウグスティヌスにどのように教理教育を行ったらよいかを尋ね、それに対する回答の形で記されているものである。アウグスティヌスは「わたしも、自分に満足のいくような話をしたことは、ただの一度だってありません」<sup>17)</sup>と述べ、この課題に応えるのは一方では難しいかもしれないが、このようなアドヴァイスをしている。「いちばん重要なことは、教理を教える人が喜びの心を持って教える

にはどうすればよいかということです。その人のことばは、その人の持つ喜びに比例してじょうずなものとなるからです<sup>18)</sup>。

語るべき内容に関して、アウグスティヌスはこの「手ほどき」を「話」(narratio) というモチーフで語っていく。

まず「はじめに神は天と地を創造された」(創世記1:1)と聖書に書かれているできごとから始めて、現代の教会までの歴史全体について初心者に教えるなら、そのとき話(narratio)は完全なものとなります<sup>19)</sup>。

この後のところで、具体的にこの話(narratio)を展開していき、歴史全体を救済史として七つの時代に区分して語っていく。それをまとめてこのように言う。

以上われわれは、世界の五つの時代について考察してきました。この第一の時代は、人類の起源、すなわち、最初に創造された人間であるアダムから、洪水のときに箱舟を造ったノアまでの時代です。それから第二の時代は、ノアからアブラハムまでの時代で…。この最初の二つの時代に関しては、旧約聖書にはっきり記述されています。残りの三つの時代に関しては、福音の中でわれわれの主イエズス・キリストの血統が述べられているところにするされています。第三の時代は、アブラハムからダビデ王までの時代です。第四の時代は、ダビデから神の民がバビロンに移住した捕囚までの時代です。第五の時代は、この移住からわれらの主イエズス・キリストの到来までの時代です。キリストの到来から、第六の時代が始まります<sup>20)</sup>。

アウグスティヌスが生きている時代は第六の時代である(今の私たちの時代も含まれる)。来たる第七の時代が安息の時代である。このような「聖書的」な「語り」を「教えの手ほどき」として求道者にするように、アウグスティヌス

は助祭デオグラチアスに勤めていくのである。

このような手ほどきを受けて求道者として過ごす期間、求道者は礼拝の第一部に与る権利を得て説教を聴くようになる。その後、いよいよ洗礼を志願することになる。その希望を申し出て自分の名を洗礼志願者の名簿に登録してもらう<sup>21)</sup>。そして受洗志願者として過ごす最後の期間、たいていはイースターの洗礼式の一週間前に、「信条の伝達」(traditio symboli) がなされ、受洗志願者は伝達された信条を暗記し、「信条の復唱」(redditio symboli) をすることが求められた。

「信条の伝達」の内容は、「信条講解」として豊富な史料が残されている。ミラノの司教アンブロシウスが行った「信条講解」の内容は、その講義に出席していた者によって書き残された<sup>22)</sup>。アウグスティヌスは、自身が洗礼を受けた際にアンブロシウスから手ほどきを受けたミラノ信条に基づく信条講解と<sup>23)</sup>、アウグスティヌスが司教として働いていたヒッポの教会で用いられていたヒッポ信条に基づく信条講解の史料を残している<sup>24)</sup>。ルフィヌスは司教ではないが、自身が洗礼を受けた際に教えられたアキレイア信条の注解を書き、しかもローマ信条との違いを解説してくれている大変貴重な史料を残している<sup>25)</sup>。信条講解を含めて、受洗志願者としての心得や、受洗直後の講話も含めて最も整った形で講話を残してくれているのがエルサレムのキュリロスである(次節で詳細に触れる)<sup>26)</sup>。

その他にも多くの信条講解の史料が残されている。このことから分かるように、古代教会は「語り」の時代であり、特に「聖書的」な「語り」として信条の講解が重んじられたのである。聖書がまだ確定していない時代に、あるいは確定しつつある時代に、信条が「聖書的」に語られていった。特に洗礼直前になされる信条講解は、「聖書的」「語り」のクライマックスであった。

### 3. 共同体

「聖書的」な「語り」がなされるということは、語る者（たち）と聴く者（たち）が存在することになるため、そこに「共同体」が形成されることは必然である。前節でいくつか挙げた信条講解の中から、エルサレムのキュリロスの『教理講話』を取り上げ、「聖書的」「語り」によって「共同体」が形作られていく様子を垣間見ることにしよう。

この『教理講話』は、エルサレムの司教キュリロスによって、コンスタンティヌス帝によりエルサレムのキリスト墳墓の上に建てられたアナスタシス聖堂において行われた<sup>27)</sup>。最近の研究では若干の年代の修正がなされているが<sup>28)</sup>、その修正も細微なものであり、年代としては350年頃と考えて差し支えない。

『教理講話』の全体は24講話から成る。その構成は次の通りである。初めに、序（プロカテケシス）が来る<sup>29)</sup>。これは、これからいよいよ講話を受けようとしている者たちに対するインストラクションである。続いて本論部分の18の講話が続く<sup>30)</sup>。その中核は、講話6-18より再構成される「エルサレム信条」の注解である。そして最後に5つの講話（ミスタゴギア）で閉じられる<sup>31)</sup>。これは洗礼の直後になされる講話であり、今受けた洗礼のこと、そしてこれから受けようとしている聖餐のことを秘儀として説き明かしているものである。全体の構成について、小高はこうに言う。

序の講話は四旬節の初めに行われ、四旬節の間にエルサレム教会の信条の説明からなる一八の講話がなされた後、復活前夜に洗礼を受けた新受洗者に洗礼、堅信（塗油）、聖体の秘跡について説明するものがミスタゴギアで、復活祭後の一週間になされている<sup>32)</sup>。

序（プロカテケシス）はこのように始まる。「み光を受けかけているあなたがたには…あなたの名前を登録しました（'Ονοματογραφία）」<sup>33)</sup>。この登録

(名を記す)という言葉は、序(プロカテケシス)の中で何度か使われている。「事実あなたがたは入って来たし、歓迎され、登録されました(ὄνομα σου ἐνεγράφη)」<sup>34)</sup>。「登録されたあなた方は(οἱ ἀπογραφέντες)、一人の母親の息子となり、息女となったのです」<sup>35)</sup>。これまでは「求道者(κατηχούμενος)」<sup>36)</sup>と呼ばれていた者たちが、洗礼志願者へと名前が登録され、この講話の序(プロカテケシス)を受けているのである。そして講話を本格的に聞くにあたり、耳で聞くだけでなく心に悟るように聞くようにとの勧告がなされる<sup>37)</sup>。今までの求道者の時代にも数多くの説教を聞いてきたはずであったが、これまでの説教とこれから語られる説教は決定的に違いと語られる。「これはありきたりの説教とは違います。説教は、なるほど信仰のためには大変よいものですが、今日聞き逃しても、明日また学ぶことができます。しかし、順序正しく伝授された洗礼の再生に関することの教えは、そういうわけにはいきません。今日聞き逃したら、いつまた補うことができます。…カテケシスは建築のようなものでもあります。…あなた方は生ける神のこと、審きのこと、キリストのこと、復活のことなどに耳を傾けなければなりません」<sup>38)</sup>。

この序(プロカテケシス)を終えて、いよいよ本格的に教理講話を聞くことになる。「エルサレム信条」の注解が始まる直前に、キュリロスは洗礼志願者たちにこのように言う。少し長いが引用しよう。

信仰を学び、それを公言してください。それを受け取り、保ってください。しかし教会から今あなたがたに届けられ、すべての聖書から力強く築き上げられたものだけに限ります。すべての者が聖書を読むことができないので、また学問があるわけではないので、また暇があるわけではないので、魂が無知から滅びないように、私たちは信仰の教えを数行にまとめました。この要約を記憶し、あなたがた自身の間で熱心に繰り返すことを望みます。紙に書き留めてはならず、あなたがたの記憶と心に留めてください。しかしあなたがたが繰り返す時、あなたがたに手渡された言葉を誰からも聞かれないようにしてください。あなたがたの人生のすべての瞬間に

おける旅路の食物としてください。たとえ私たちが心変わりしてしまったり、今の教えとは矛盾を感じたりしても、また光の天使に姿を変えた悪い天使（Ⅱコリント11:14）があなたがたを迷わせようと思っても、これ以外のものは決して受け取ってはなりません。もし私たちや天からの使いがあなたがたの受けた福音とは別の福音をあなたがたに説いたとしても、彼を排斥してください（ガラテヤ1:8-9）。それゆえ、今から後に示される信条をよく聞いて、その言葉を記憶に留めておけば、しばらく経った後で、その内容の各部分を聖書から証明されることを教えられるでしょう。なぜなら、信条の各条項は、人間の選択によってではなく、聖書全体から最も重要な点を集めて、一つの信仰の教えを示しているからです。からし種が一つの小さな粒の中に多くの枝を含んでいるように、この信条も旧新約聖書にあるすべての信仰的な知識を少ない言葉で包含しているのです。兄弟たちよ、よく注意して、この伝統を堅く守り（Ⅱテサロニケ2:15）、それを心の板に書き記してください（箴言7:3）<sup>39)</sup>。

大事なことがいくつか指摘されている。第一に、信条が聖書の要約であるということである。「信仰の教えを数行にまとめました」とある。どこからまとめたのか。「すべての聖書から力強く築き上げられたものだけに限ります」と言っている通り、聖書全体からである。「信条の各条項は、人間の選択によってではなく、聖書全体から最も重要な点を集めて、一つの信仰の教えを示している」や「この信条も旧新約聖書にあるすべての信仰的な知識を少ない言葉で包含している」と述べられている通りである。

第二に、この短い要約である信条を教会が保持しているということである。「それを受け取り、保ってください。しかし教会から今あなたがたに届けられ…」と語られているように、洗礼志願者たちは今、まさに教会が保持している信条を「信条の伝達」(reditio symboli)として手渡されようとしている。そして手渡された信条を、自分の心の中に暗記することが求められる。

第三に、この信条の言葉をみだりに口にしてはならないということである。

「この要約を記憶し、あなたがた自身の間で熱心に繰り返すことを望みます。紙に書き留めてはならず、あなたがたの記憶と心に留めてください。しかしあなたがたが繰り返す時、あなたがたに手渡された言葉を誰からも聞かれないようにしてください」と語られているのは、後述する「守秘規定」(disciplina arcani) のことである。

このような注意事項が示された後に、「エルサレム信条」が示される。キュリロス(他の多くの人たちと同様に)信条の言葉を少しずつ区切りながら示し、その言葉を注解するスタイルで講話を語っている<sup>40)</sup>。そのバラバラになっている言葉を一つにまとめて再構成した「エルサレム信条」は以下の通りである<sup>41)</sup>。

私たちは唯一の神、全能の父であり、天と地、見えるものと見えないものの両方の万物の造り主を信じます。

また、唯一の主、イエス・キリスト、神の独り子、すべての時代に先立って真の神として父から生まれ、「彼を通して万物は成った」(ヨハネ1:3、Iコリント8:6)、彼は(受肉して)人と成り、(十字架につけられ、葬られ、)三日目に(死者の中から)復活し、天に昇り、父の右の手に座し、「生ける者と死せる者とを裁くために」(IIテモテ4:1、Iペトロ4:5)栄光の内に来るだろう、彼の国は終わることがないだろう。

また、慰め主なる唯一の聖霊、預言者たちを通して彼は語った

また、罪の赦しのための悔い改めの唯一の洗礼

また、唯一の聖なる公同の教会

また、体の甦り

また、永遠のいのち

325年の(原)ニカイア信条と類似している点も見受けられ、写本によっては(エルサレム信条の講解の終わりの18.12に)、後代の付加と思われるが(原)ニカイア信条を挿入しているものもある<sup>42)</sup>。また、381年のニカイア・コンスタ

ンティノポリス信条との類似している点も見受けられ、エルサレム信条は文言として、(原)ニカイア信条とニカイア・コンスタンティノポリス信条の中間に位置する信条であることが分かる。

このようにして示された信条を、秘密にしておくようにということが強調される。これは先に引用した『教理講話』5.12のところでも触れたように、「守秘規定」(disciplina arcani)と呼ばれるものであり、「いくつかの神学的な教理や宗教的な慣行を洗礼志願者や異教徒に対して秘密にする、初期の教会で行われていた慣習」<sup>43)</sup>のことである。キュリロスは序(プロカテケシス)のところですでにこう述べている。

外部の人には漏らさないでください。奥義や永遠への希望を、われわれが伝えているのは、あなた方だからです。お礼を差し出す人に対しても秘密を守ってください。わたしに知らせてくれてもいいではないかと言う声などには耳を貸さないでください。…あなた方は、いま閻を跨いだところです。これからは何も喋らないように気をつけてください<sup>44)</sup>。

「守秘規定」(disciplina arcani)という言葉が定義されて使われるようになったのは17世紀になってからのことだが、このような考え方に基づく実践はテルトゥリアヌス、キプリアヌス、オリゲネス、エルサレムのキュリロス、エゲリア、クリュストモス、アンブロシウス、インノケンティウス1世、アウグスティヌスらに見られ、幼児洗礼の発展と共に6世紀には廃れたが<sup>45)</sup>、西方でも東方でも洗礼や堅信、聖餐などの典礼に残っていった<sup>46)</sup>。

この「守秘規定」(disciplina arcani)が強調されるに比例して、教会の「共同体」の境界線もより鮮明にされることになる。内部の者は信条を知り、外部の者はまだ知らないという状況が作られる。「信条の伝達」は司教らによって「聖書的」な「語り」がなされることによって行われ、その結果、「共同体」が形成されるのである。古代教会にはこのようなはっきりした教会観があった。

## おわりに

本論文では「聖書の語りの共同体」という主題にしたがって、それぞれの言葉を考察してきた。まとめると以下ようになる。

古代においては何が「聖書」なのかをめぐる激しい論争があり、四世紀末になってようやく「聖書」が形作られた。それまでは聖書と伝統がほぼ同等（聖書≒伝統）という考えが主流であり、イエス・キリストから使徒、使徒から教会へ手渡された「信仰の基準」や信条が、「聖書」の「聖書的」であることを支えた。

また、古代は「語り」の時代だった。説教では「聖書講話」「教理講話」「教会歴講話」などの幅広い分野で「語り」が展開されていたが、特に「聖書的」また「教理的」語りとして「信条講解」が盛んになされ、その言葉も整えられていった。

信条講解は洗礼志願者に対して受洗直前になされることが多かった。受洗志願者には「守秘規定」が定められるなど、教会「共同体」の内外は厳格に規定された。教会の内側に入るためには「聖書的」「語り」を聴き、受け取り、告白することが求められた。そのようにして「共同体」が形成されるのである。

本論文では「聖書的」「語り」「共同体」という順に考察をしてきた。順番的には「聖書(的)」が形作られ、それが「語られ」、それによって「共同体」が構築されたと理解されるかもしれないが、必ずしもそういう順番に限定されない。ゴルヴィッツァー(H.Gollwitzer)は、新約聖書の記述はすでに、伝統としての共同体の信仰告白のすべての定式を前提としており、それらを詳述したものであると主張している<sup>47)</sup>。ペリカン(J.Pelikan)もこれと同様の主張をなし、例えばフィリピの信徒への手紙2:5-11の「キリスト賛歌」に関して、三位一体的またキリスト論的な解釈がすでに共同体の中で「信条」として先行して育まれ、伝統としてそれが語り継がれ、それが新約聖書に組み込まれた結果、あのような「キリスト賛歌」が出来上がったと指摘している<sup>48)</sup>。つまり、「聖

書」「語り」「共同体」のどれが先かと言うと、「聖書」よりも「共同体」の中で「語られていたこと」の方が先であると言えるのである。したがって、「聖書的」「語り」「共同体」は順不同でもあり、同時的であるため、それぞれが一体であることを踏まえなければならない。

古代教会はまさしく「聖書的語りの共同体」であった。現代に話を移してみると、「聖書」はすでに正典として確立している。しかしその解釈や理解をめぐって、混乱が生じているのが私たちを取り巻く状況である。なぜ混乱が生じているのか。本論文で考察してきた観点で言うならば、「聖書」が「聖書的」であることが分からなくなっていることが指摘できるし、「聖書的に」「語る」力が失われているし、「聖書的な語り」による「共同体」の形成がしっかりとなされず、特に教会の内外が曖昧になっている現実があるのだろう。もう一度、古代教会の「聖書的語りの共同体」に立ち返る必要があるのではないか。

(ほんじょう・こうた)

## 注

- 1) 本論文は2023年1月10日に東京神学大学で行われた「教職者のためのオンライン・シンポジウム」で発表した内容をまとめたものである。
- 2) ドロシー・セイヤーズ『ドグマこそドラマ』（中村妙子訳、新教出版社、2005年）
- 3) 前掲書、p.12
- 4) エレン・デイヴィス、リチャード・ヘイズ編『聖書を読む技法』（芳賀力訳、新教出版社、2007年）、p.131を参照。本書の第5章「教父たちの積義はまだ有用か」がブライアン・E・デイリーの論文である。
- 5) エイレナイオス『異端反駁』III.11.8（小林稔訳『キリスト教教父著作集』第3/I巻、1999年、教文館、pp.43f）
- 6) エイレナイオス『異端反駁』III.11.9（『キリスト教教父著作集』第3/I巻、p.45）
- 7) J.N.D.ケリー『初期キリスト教教理史（上）』（津田謙治訳、一麦出版社、2010年）、p.74を参照。ケリーは、ユスティノスやタティアノスらの考えを含めて考察し、二世紀の時代は新約聖書が一つの文書として形成されていたとは言い難いが、「それらが一つになる形成過程にあったとは言えるであろう」（p.74）とし

ている。

- 8) エルサレムのキュリロス【教理講話】4.36.
- 9) アタナシオス【復活祭書簡】39（『原典古代キリスト教思想史』2、教文館、2000年、p.45）。
- 10) K. バイシュラーク【キリスト教教義史概説 [上]】（掛川富康訳、教文館、1996年）、p.235.
- 11) 【カトリック教会文書資料集】（改訂5版、エンデルレ書店、2002年）、p.43.
- 12) 棚村重行【現代人のための教理史ガイド】（教文館、2001年）、pp.89-96.
- 13) テルトウリアヌス【異端者への抗弁について】21（下線は筆者による）（R.Refoulé, *Traité de la prescription contre les hérétiques*, Sources Chrétiennes, 46, 1957）。
- 14) 小高毅編【古代教会の説教】（教文館、2012年）、pp.12f
- 15) 同掲書、pp.16ff
- 16) アウグスティヌス【教えの手ほどき】（キリスト教古典叢書4、熊谷賢二訳、創文社、1964年）。
- 17) アウグスティヌス【教えの手ほどき】2.3.
- 18) アウグスティヌス【教えの手ほどき】2.4.
- 19) アウグスティヌス【教えの手ほどき】3.4.
- 20) アウグスティヌス【教えの手ほどき】22.39.
- 21) 後述のエルサレムのキュリロス【教理講話】でも同様である。
- 22) アンブロシウス【信条講解】（*Patrologia Latina* 17:1155-1160）。
- 23) アウグスティヌス【説教】213（Augustine, *Essential Sermons*, introduction and notes D.E.Doyle, trans. E.Hill, ed. B.Ramsey, New City Press, Hyde Park, New York, 2007, pp.264ff）。
- 24) アウグスティヌス【説教】215（Augustine, *Essential Sermons*, pp.272ff）。
- 25) ルフィヌス【信条注解】（Rufinus, *A Commentary on the Apostles' Creed*, Translated and Annotated by J. N. D. Kelly, 1995: Longmans, London）。
- 26) エルサレムのキュリロス【教理講話】（文献に関しては以下の注を参照）。
- 27) 『中世思想原典集成』第2巻（平凡社、1992年）、p.142.
- 28) D. Alexis. "The Date of Cyril of Jerusalem's Catecheses" in *The Journal of Theological Studies*, vol. 48, no. 1, 1997, pp.129-32.
- 29) 『古代教会の説教』に日本語訳が収録されている。
- 30) この部分の日本語訳はない。ギリシア語原文は、F. L. Cross ed., *Cyril of Jerusalem's lectures on the Christian sacraments : the Procatechesis and the five*

*mystagogical Catecheses*, S.P.C.K., 1951に収められている。英訳は、L. P. McCauley, A. A. Stephenson trans., *The works of Saint Cyril of Jerusalem*, vol. 1, vol. 2., Catholic University of America Press, 1969など、複数のものがある。

- 31) 『中世思想原典集成』第2巻に『洗礼志願者のための秘儀教話』として収録されている。
- 32) 『古代教会の説教』 pp.76f.
- 33) エルサレムのキュリロス 『教理講話』 序 .1.
- 34) エルサレムのキュリロス 『教理講話』 序 .4.
- 35) エルサレムのキュリロス 『教理講話』 序 .13.
- 36) エルサレムのキュリロス 『教理講話』 序 .6.
- 37) エルサレムのキュリロス 『教理講話』 序 .6.
- 38) エルサレムのキュリロス 『教理講話』 序 .11.
- 39) エルサレムのキュリロス 『教理講話』 5.12.
- 40) エルサレムのキュリロス 『教理講話』 6-18.
- 41) Edited, annotated, and translated by W.Kinzig, *Faith in Formulae: A Collection of Early-Christian Creeds and Creed-related Texts*. 4 vols., New York: Oxford university Press. 2017, § 147.
- 42) E. Yarnold, *Cyril of Jerusalem*, New York : Routledge, 2000, p.88.
- 43) 『オックスフォードキリスト教辞典』(3rd ed.の部分訳)、p.396.
- 44) エルサレムのキュリロス 『教理講話』 序 .12.
- 45) *The Oxford Dictionary of the Christian Church*, 4th ed.に収められている *disciplina arcani* 項目 (p.560) を参照。
- 46) *New Catholic Encyclopedia*, 2nd ed.に収められている *Secret, Discipline of the* の項目 (vol. 12, pp.856f) を参照。
- 47) H. Gollwitzer, "Die Bedeutung des Bekenntnisses für die Kirche." In H. Gollwitzer and H. Traub, eds., *Hören und Handeln: Festschrift für Ernst Wolf zum 60. Geburtstag*, 156.
- 48) J.Pelikan, *Credo : historical and theological guide to creeds and confessions of faith in the Christian tradition*, New Haven : Yale University Press, 2003, p.135.